

タブレット端末を用いたパンフレット作りの学習

—ロイロノートを活用した割り付けの再構成過程—

Teaching writing pamphlet of Japanese culture using tablet device

— Reconstruction of multimodal types with Loilo note school—

小林一貴¹, 森孝太²

KOBAYASHI Kazutaka¹, MORI Kota²

[キーワード Keyword]	書くこと, パンフレット作り, 推敲, keynote, ロイロノート, クラゲチャート, 情報の活用, ICT教育
[所属 Institution]	¹ 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University), ² 北方町立北方小学校 (Kitagata Elementary School, Kitagata Town)

[要旨 Abstract] 書くことの学習指導について、読むことならびに情報との関連から単元を構成し、ICTを活用した日本文化を発信するパンフレット作成の学習の一端を考察した。単元については、画像や文字テキストそれぞれの表現世界の検討を通して、それらの混交による表現の意味構築を目的とした。また、ICTの活用については、iPadのpages、keynoteを用いてパンフレットの割り付けと構成を行い、またロイロノートを活用することで学習の段階に応じて作品を共有し、交流を通して各自の学習を振り返ることができるようにした。授業を通して、ICTの活用により作品の紙面の構成や作品の相互交流が効率的にできるものの、画像と文字テキストの機能についての検討、ならびに意味構築の過程の自覚をいかに保証するかが課題となった。書くことの学習指導として、従来の授業実践で指摘されてきた資料の選択やその批判的な読み解きといった過程について、ICTを用いながらいかに学習過程として展開していくか、またそうした過程がマルチモーダルな表現の学習内容として学習者にどのように理解されていくかについて授業実践とその過程の分析を行っていく必要があることを指摘した。

1. はじめに

書くことの学習指導については、思考力・判断力・表現力等の育成に向けて、情報を分析したり、評価したりする言語活動が要請されてきており（小原2012）、教科書教材においても、読むことと書くこと、そして情報との関連に基づく単元が設けられている。また、こうした単元においては、ICTを活用することにより、言語的テキストに加えて図表や絵、写真などの情報にアクセスし引用する、また、学習過程を授業者や学習者同士で共有しながら各自に適したかたちで学習を進めるような指導方法も検討されてきており、「学習者用デジタル環境が整備されることで、どのような指導の必要性が生じるのか、指導方略の研究を進める重要性が高まっている」（中橋 他2016:105）という状況にある。本稿では、こうした状況をふまえ、iPadのkeynoteとロイロノート・スクールを用いてパンフレットを作る授業実践を示すとともに、学習の実際の一端を検討する。

2. 情報の扱いについて（単元構成の考え方）

授業で用いるのは、「日本文化を発信しよう」（『国語 六 創造』光村図書）である。この教材は、「『鳥獣戯画』を読む」、「調べた情報の使い方」の後に位置づけられており、これらの指導内容との関連が想定されている。このような教材を用いて授業を行う場合、国語科の内容の観点からすれば、読むこと、ならびに情報の学習事項をふまえて、書くための資料や情報に向ける興味や関心を書くことの学習にいかに関わりつけるかが授業実践において問われる。

平成29年告示の学習指導要領国語編では、「情報の扱い方に関する事項」が設けられたことをふまえ、光村図書のHPにおける「編集の趣旨と特色」には、「書くこと」と「情報」の関連について言及がなされている。そこでは、「新しい学習指導要領では、「情報の扱い方に関する事項」が新設」されたことをふまえ、「書くこと」では「「情報」教材と組み合わせる」効果的に学習が進められるようにしたとしている。そして、

「「情報」の系列」を設けるとともに、「国語や他教科の学習活動、日常生活にいかせる力となるよう、各領域の学習活動と密接に関連させて配置しています」としている。(https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/henshu/2020k_hen_04.pdf 2021.3.12 閲覧) このように、教科書教材の構成に関して、「書くこと」領域と「情報」との関連がなされており、ここから書くこの教材を用いた授業では情報との関連を視野に入れつつ、具体的な資料にどのように関わっていくかが実践的な課題となる。

こうした課題に関して、今回の授業では、奥泉(2018)で取り上げられている「急激な社会の枠組みの変化や情報技術の発達の中で、生成される」ような「新たなタイプのテキストから意味構築を行ったり、あるいは新たなタイプのテキストを産出したりする過程」(奥泉2018:237)についての「三つのデザイン概念」(ニューロンドン・グループによる)に依拠する。「三つのデザイン概念」とは、「①アベイラブルデザイン(Available Design)、②デザインング(Designing)、③リデザインド(The Redesigned)」である。「①は、既にデザインされて在るものという意味で、そこから新たな意味構築を行うための既存のテキストやコード等の資源を指している。そして②は①の既に在るデザインを使って、つまり学習者の既習・既有的知識等を使って、新たな意味構築を行う記号過程のことである。最後の③は、②のデザインするその記号過程によって、新たに意味が付与されたテキストのことである。」(同:105)とされている。これらの概念をふまえ、まず『鳥獣戯画』を読むの学習過程を教材である説明文の理解、絵画に対する学習者による意味構築、学習者によるテキストの生成を通じた絵画への意味構築、としてとらえた。こうしたとらえ方に関わって、遠藤・渡邊(2020)はその語られ方が重要になるとして次のように述べている。

「言語記号で語られる筆者の目を通した絵巻の世界、そして絵巻そのものが内包し、見る者に語りかけてくるメッセージ、読み手自身が把握した絵巻の世界とでは、三者が対立構造を有するわけでも、またいずれかが主でいずれかが従であるということでもなく、緊密に有機的関連をもちながら文章としてのまとまりを形成している。読者は自らの見方・考え方、筆者の見方や主張、そして絵巻の世界を往還しながら重層的に読みを深めることになるのだろう。その要を担うのは語り手の存在であり、読者を誘うとともに、三者をバインドする重要な役割を担っているのである。」(遠藤・渡邊2020:2)

「筆者の目」、「絵巻」、「読み手」の三者を結びつける「語り手」の存在を中心に据える授業のデザインの考え方が示されている。この考え方に基づいて、「三つのデザイン概念」をふまえつつ、特に「三者をバインドする」ような「語り手」としての書き手を育成することをねらいとして、「『鳥獣戯画』を読む」と「調べた情報の使い方」との関連から、「日本文化を発信しよう」の単元を構想した。

こうした考え方に関連して、後藤(2016)は、「すがたをかえる大豆」と「食べ物のひみつを教えます」の関連に基づく授業と学習の考察を行っている。後藤はこの教材について、「読んだことを生かして書く学習の典型である」ような、定番化した教材であるとしている。定番化の要因は、「自分が興味をもった食材について、それがどのような料理になるのかを調べて文章にまとめていくので、楽しい活動になる。うまく書くとまるで教科書のような作品になる。そうになると、友だちと文章を読み合って感想を交流するのも楽しくなる。」(後藤2016:10)という学習者の側の理由と、「関連する図書の多さ」(同:11)により、「教師にとっては、何と言っても教えやすい単元である」(同:10)という、授業者の側の理由があるとする。しかし、「パッケージ化された単元には、目に見えない大きな力がある。この大豆単元で言えば、子どもたちをある一つの型をもった作文に向かわせる力である。」(同:11)とも述べ、同じような型にはめて文章を作ることが目的化するような授業になりがちであると指摘する。こうした点を問題として、情報を選択し、自ら基準を見出しながら活用して書いていく授業を報告している。

後藤の授業の流れは、冒頭で「大豆以外の「すがたをかえる」食材について、説明的文章を自分で書いてクラスの友だちと交流するという単元のゴールを子どもたちと確認」し、「「すがたをかえる大豆」を読みながら、筆者である国分牧衛の書き方を学び、どんなところを「まね」できるか」を考え、自分の選んだ材料について「食べ物のひみつを教える」文章を書くというものである。この授業について、学習者の作文事例(「はる子作文」)を取り上げて、学習の実際を検討している。この作文を書いた児童は、「図書資料の中から「自分が作れる、作ってみたい牛乳料理についての情報」「自分で短く書きまとめられるような情報」という二つの基準に照らしながら情報を選択して、「すがたをかえる大豆」で学んだ構成を活用し、友だち

に説明する文章を書くという学習をした」(同:14)という。その中で、児童は、選択から記述への過程で「作り方よりもより簡単なものを選んでいった。しかしそれでもまとめることができず、直接「どうすれば短くなりますか。」と授業者に質問して、書き方のアドバイスを受けたという経緯がある」(同)。その上で、「なぜわたしはチーズについて調べたのに、作文には載せなかったのか」「なぜヨーグルトは簡単な作り方のものだけを書くことにしたのか」ということを考え、自らの言葉でふり返るということ」(同)を行っており、「これまで無自覚であった自分の情報の選び方、表現の仕方に目を向ける」ことを行っていた、つまり自身にとっての「情報を選択し活用する力を育てるための視点」を持つようとしていたと考察している。この考察を通して、後藤は次のように述べている。

「子どもが「自分を語る」というとき、教師が直接「どうしてこんな作文を書こうと思ったの?」とたずねればいいというものではない。自分と他の文章を比較して、書き手の意図と内容-構成のかかわりを考えたり、「なぜ筆者はこのように書いたのか」と批評的に文章を読んだりする学習や、実の場に向けて目的意識相手意識を明確にしながらか表現する学習、さまざまなメディア・表現形態において情報を編集し、交流する学習などを通して、実感をもって「自分」に気づいていくのである。」(同:15)

ここでは、情報を選択し活用する視点を持った語り手としての書き手、そうした書き手であることを語れるような自覚的な書き手のあり方が論じられている。このような書き手の育成をねらいとして、学習者が選んだ題材について調べる機会を設け、ICTを活用しながら情報をいかに選択し活用するかを話し合う活動を設けることにより、学習者にとってのパンフレットを書くことの単元を構想し、言語活動を組織した。

3. 授業の概要

授業は岐阜県内の小学校6学年のクラスで行った。実施時期は2021年10月であり、授業者は第二著者の森孝太である。実践を行った学校ではiPadが一人一台使えるようになっており、国語科以外の授業でも既にiPadを用いた授業が行われてきていることから、学習者は端末の操作に習熟している。また、ロイロノートを用いた授業の進め方に困難を感じることはほとんどない状況にある。

3-1. 単元の基本構成

2.で示したような考え方にに基づき、「『鳥獣戯画』を読む」と「調べた情報の使い方」と「日本文化を発信しよう」との関連から「表現の工夫をとらえて読み、それをいかして書こう」を目標として、次のように単元を構成した。

<p>単元の目標</p> <p>◎引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することが出来る。</p> <p>◎パンフレットを作るために、文章と図などを結び付けるなどして、必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりすることができる。</p> <p>○筋道の通った文章になるように、文章全体の構成や展開を考えることができる。</p> <p>○情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことが出来る。</p>
<p>単元の評価規準</p> <p>知識及び技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使っている。 <p>思考力・判断力・表現力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。 <p>学びに向かう力・人間性等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的に情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し、学習課題に沿って日本文化についてのパンフレットを書こうとしている。
<p>言語活動</p> <p>表現の工夫をとらえて読み、それ生かし書こう (パンフレット)</p> <p>本単元では、「パンフレットを作るために引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考え伝わるように書く力」をつけるために、言語活動として「パンフレット作り」を設定した。パンフレットは、あるテーマに沿って、複数枚の紙を重ね綴じた冊子である。パンフレットは、自分の伝えたいことを文章と写真や図表などを活用し分かりやすく伝えることができる。そのため、「『鳥獣戯画』を読む」におい</p>

て、高畑さんの絵と文章の組み合わせ方や表現の工夫を学び、それをいかしてパンフレットを作る活動を位置付けることで写真や図表などといった情報を関係付け、言語内容と言語表現を繋げて考えることができると考えた。このことから、付けたい力をつけるためにふさわしい言語活動であると考え。

<本単元で働かせる見方・考え方>

「筆者の絵と文章を照らし合わせて表現している様子やそれぞれの評価についての表現の工夫に着目し、自分のパンフレットの表現に活用すること」

単元の導入では、「日本文化を発信する」との関連を意識して、日本文化についてのパンフレットを作るという見通しを示した。パンフレットのイメージについては近隣の図書館に行って三つ折りのパンフレットを見る機会を持ち、そのタブレット版を作成するというイメージを持たせた。

単元の前半(2~6時)では、「『鳥獣戯画』を読む」の本文の理解を基本としつつ、「絵」に対する学習者の印象や解釈を断続的に行いながら、それを筆者の表現、特に「評価」に関わる表現と対照しながら読み進めることを行った。絵巻そのものについて学習者自身の見方をとるとともに、筆者の目線を通した絵巻の評価を確認しながら、語り方の特徴に沿って文章を理解できるようにした。後半(7~12時)では、「日本文化を発信する」に沿って、パンフレットの作成を行う。7時間目では、複数の題材を提示し、その中から一つを選択するとともにその題材について学習者独自の観点から小項目を設定する。そして、パンフレットの見出しと小見出しの案を作成する。8時間目では、本やインターネットを通して必要な情報を集め、9時間目以降ではiPadのkeynoteを用いて割り付けや構成を考え、ロイロノートに提出し、学習者同士での交流を通してパンフレットを作成していくという流れである。単元の全12時間の流れの概要は以下の通りである。

単元構成表 (全12時間)

時	単位時間の目標 (全8時間)
1	本単元の扉を読み、筆者の表現に着目することやそれを生かして自分が伝えた日本文化についてのパンフレットを作るという単元の出口を明確にする。そのために、論の展開や表現の工夫、絵の示し方について学習していくことで筆者の表現の工夫を知ることができることを確かめ、学習の見通しをもてるようにする。そして、単元のめあて、学習計画表を作成する。
2	絵と文章を照らし合わせながら、ウサギとカエルについて読もう。 ・絵全体の中でどの場面を取り上げているのか。 ・ウサギとカエルそれぞれの取り上げた特徴を整理する。
3	筆者の「絵」についての評価を読もう。 ・絵のどこがどのようによいて考えているのか。 ・筆者の表現から読む。
4	筆者の「絵巻物」についての評価を読もう。 ・絵巻物とはどのようなものか。 ・それをどのように評価しているのか。
5	筆者の論の工夫を考えよう。 ・論の展開の仕方 ・表現の工夫 ・絵の示し方
6	筆者の表現の工夫をまとめよう。 ・よさを説明したり、評価を述べたりしているところで、まねしたいところ。 ・写真や絵の使い方、説明の仕方でも効果的だったところ。
7	自分が伝えたい日本文化について題材を決め、パンフレットの構想を考えよう。 ・建物、食事、衣服(着物)、日にち、神様(七福神)、わびさび、花道、茶道、風習など ・パンフレットの項目を考える。
8	パンフレットを作るために必要な情報を集めよう。 ・本やインターネットなどで、必要な情報を集める。
9	パンフレットを作るために、構成や割付を考え、下書きをしよう。 ・iPadのkeynoteを活用して、割付や構成を考え、作成していく。
10	パンフレットを完成させよう。 ・構想を基にして、パンフレットを完成させる。 ・keynoteで作成したパンフレットをロイロノートに提出する。
11	作ったパンフレットを読みあつて感想を伝えあおう。 ・ロイロノートで、全員のパンフレットを読み、班の仲間や感想を伝えたい仲間のもとへ行き、感想を伝える。

1 2	学習のまとめをしよう。 ・本単元で「何が」できるようになったのか。 ・どうしてできるようになったのか。
-----	---

3-2. ICTの活用について

9時間目以降の授業では、交流活動を通して学習過程を相互に確認し理解し合うとともに、学習者が自身の活動を振り返り表現の変化を自覚できるような学習過程を設けた。ここで問題となるのは、学習者自身が題材を選択し、独自の観点を設けて、写真などの画像を用いながらパンフレットを作成するという学習者本位の学習をどのように進めていくかである。こうした書くことの学習について、高井（2018）は、学習者を中心とした書く過程を重視するワークショップ形式の授業の課題として、「1.学習者の把握の難しさ、2.学習者同士の交流を活性化させる手立て、3.この学習者への教師の指導の充実、4.推敲の頻度の維持と書き直しの負荷の軽減」（高井2018:50）を挙げている。これらの課題をふまえて、高井はICTを活用した作文ワークショップの実践と学習過程の分析を行っている。1.の課題については、学習者の作品制作の進行状況を共有するシステムを活用することにより把握可能になることを指摘している。この点については、本稿で取り上げる授業においても学習の進行に合わせて制作中のパンフレットをロイロノートに提出することにより、授業中あるいは授業後に学習の進み具合を把握できるようにした。課題の2.から4.について、高井はGoogleクラスルーム等を活用して、それぞれ学習の振り返りの集計機能、チャット機能、ワープロ機能を用いることで解決を図れることを論じている。こうした学習の振り返りの機会の重要性をふまえ、一方、今回の授業ではこうした機能はロイロノートで十分に活用する状況にないことから、教室において作品をiPadで相互に閲覧したり、教室の電子黒板に提出した作品を映し出したりすることにより、授業者と学習者、学習者同士の交流を基本として進めていくこととした。

また、こうした授業展開においてICTを活用する際、授業者のはたらきかけについても検討した。中橋 他（2016）によるICTを活用した国語の授業に関する研究では、授業者は「『意見交流を促進させる指導方略』『ペア学習を成立させる指導方略』『伝え方・学び方に関する指導方略』『聴き方に関する指導方略』」といったカテゴリーに区分される方略を用いていること明らかにしている。（中橋 他2016:107）こうした方略をふまえ、授業の参加者同士のやりとりを取り入れつつ、題材に沿った資料に対する評価を中心として、意見交流、作成段階におけるパンフレットについての感想や評価と割り付け・構成についての意見交流を促した。そうしたやりとりを取り入れた9時間目の授業（本時の目標：パンフレットの構成や割付を考える活動を通して、筆者のまねしたい表現の工夫や集めてきた情報を活用して下書きを書くことができる。）の展開は次のようなものである。

	学習展開	・本時における願う児童の姿	研究内容に関わって
導 入	1. 学習計画活用してこれまでの学びを振り返り、本時の学習内容の見通しをもつ。 ・日本文化パンフレットを作って学級の仲間と交流する。 ・分かりやすいパンフレットにするために筆者の工夫を使っていく。		【研究内容2】 ① 課題解決の見通しがもてる導入 学習計画表を活用して、これまでの学びを振り返ると共に言語活動の目的や相手意識をもてるようにして単元の出口を見据えて学習をすることで主体的な姿を具現できるようにする。前時に学習した筆者の評論の真似したいところを振り返る事で、下書きを書く際に意識することを明確にすることで言葉による見方・考え方を働かせることができるようにする。 ② 意図を明確にした交流活動の工夫 パンフレットは、iPad内のpages（パンフレット枠）を活用して作成をする。それにより、割付がスムーズに行え、書き直しなども抵抗なく行えると考え。作成途中で一時提出を行う。また、pagesをスクリーンショットし、ロイロノートへ提出することで、作成に困り感を抱いていた児童は仲間の構成や割付を見て参考にし、さらに進めたい児童は、自分のデータをさらに進めることができる。個別最適な学びが実現できると考える。
展 開	2. 課題の確認をする。 構成・割付を考え、下書きをしよう。		
	3. 筆者の評論文のまねしたいところを想起して、それを活用して構成を考えることを確かめる。 ・絵と文章を組み合わせて説明しよう。 ・写真の出典を入れてその様子が伝わるような書き方を真似して書くよ。		
	4. pagesのパンフレット枠を活用して構成や割付を考えていく。 ・写真をここに貼り付けて、説明を書いていこう。		

終末	<p>5. 作れたところまでロイロノートに提出をして、仲間と構成を交流し、よいところを自分の構成に生かしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○○さんの和食を評価している言葉がとても分かりやすくよかったから、僕も使えるところがないか考えてみよう。 ・○○さんは写真のどこを見てほしいのかがよくわかる文章を書いていたな。私もまねしよう。 <p>6. 本時作成したパンフレットの下書きをロイロノートへ提出し、振り返りを書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日、僕は評論する言葉を入れてパンフレットを作ることを意識して書き、パンフレットを作りました。 ・○○さんは、写真を載せてその写真の見てほしいところを文章で詳しく書いていたので、いいと思いました。僕も写真の様子が詳しくわかるような文を入れてパンフレットを作りたいです。 	<p>③ 自己の変容を自覚する振り返り</p> <p>本時作成した下書きをロイロノートに提出した後、本時の振り返りを書く。書く時は、「自分が真似したい筆者の評論のよさを生かしてかけたか。」「書いてみてどうだったか」「仲間の下書きのよいところ」「次頑張ること」の4つの項目について振り返りを書き、自分ができるようになったことや仲間のよさから自分が頑張ることを明らかにする。</p>
----	---	--

授業の導入では、作品を相互に見る機会として交流活動を行うこと、そこでパンフレットに用いる写真と説明の文章の表現の工夫について意見交換をすることを伝える。3.では読むことの学習で学んだことを振り返りながら、写真と文章を組み合わせて表現するために、写真や表現する言葉について各自なりの印象やイメージを交換することを確認し、4.では実際にpagesのパンフレット枠を活用して構成や割り付けを考えていく。5.では、作成中のパンフレットをロイロノートに提出して相互に閲覧できるようにし、それぞれの表現上の特徴について意見交換をすることを通して、6.では自分の作品の振り返りを行う。

中心となる活動は5.の教室全体での交流であり、ここでは、具体的な題材に沿った見出し、小見出しと説明の文章について電子黒板に数名の学習者の作品を映し出し、学習者がどのようなことを考えながら作ってきたのか説明するとともに、他の学習者がそれを聞いてどのように理解したかを発現するというやりとりが行われる。例として、食事の道具を題材としたAの作品について、授業者 (T) を介して他の学習者 (C) との間では、つぎのようなやりとりが行われた。

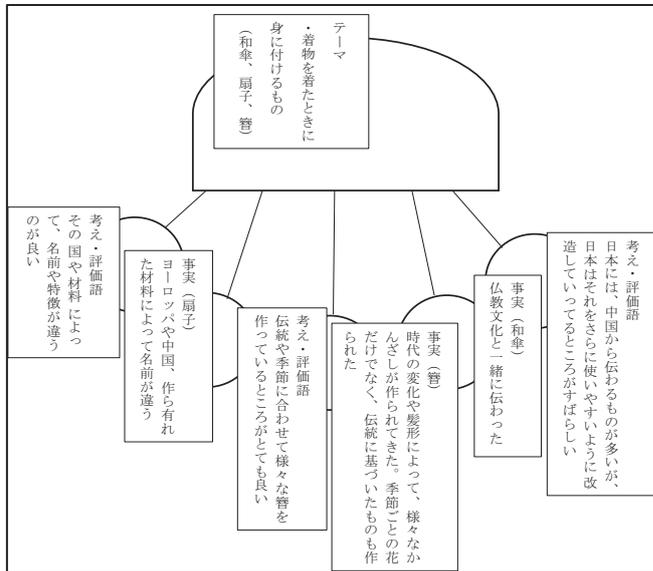
<p>T: Aさんのをちょっとみんなで見てください。これAさんのですが、食卓の道具ということでつくってくれました。</p> <p>(画像を前に映し出しながら)</p> <p>A: たくさんの道具があって、いろいろでは、座り方、私の家では座り方などは特に決まっていなくて、えっと一、席は決まっていなくても、昔は決まっていたすごいなと思いました。ちゃぶ台は、お父さんがひっくりかえすなど面白い歴史があって選びました。箱膳は、</p> <p>T: Aさんがこの絵を選んだ理由って分かりましたか。この絵、いろいろって、Aさんの思いに合ってる。どうですか。</p> <p>C: 座るところが</p> <p>T: ちゃぶ台はどうですか。</p> <p>C: じぶんの、じぶんの今の現実のと、昔のとを比較して、それを自分の生活を考えている。</p> <p>T: そうですね。箱膳という名前だそうですが、これは</p> <p>C: きれいなようす、</p>
--

学習者Aは、日本の食卓を題材として選んでおり、そこから、「いろいろ」「ちゃぶだい」「箱膳」を小見出しとするパンフレットを作成している。Aは、いろいろについては、いろいろを囲んだ席の位置を情報から示した図を用いて座り方の順序に焦点を当てて説明をしており、ちゃぶ台については「お父さんがひっくりかえす」といった道具にまつわる一般的なエピソードを交えて説明をし、全体として道具の使われていた当時と現在との違いについて、家族の関係についての考察を述べている。説明の発表に続いて、授業者はそれぞれの絵や写真を指し示しながら意見を求めているが、Cは現在の様子や昔との比較がなされており、現在の生活の考察になっているとの理解を示している。こうしたやりとりを一つのモデルとして、授業の終末では、自分自身の制作中の作品の振り返りにつなげることを意図した。

4. 学習の実際

一例として、学習者Bの作ったクラゲチャート、そしてパンフレットを取り上げ、学習の実際について見ていく。図1は、7、8時間目にかけてBが作ったクラゲチャートである。

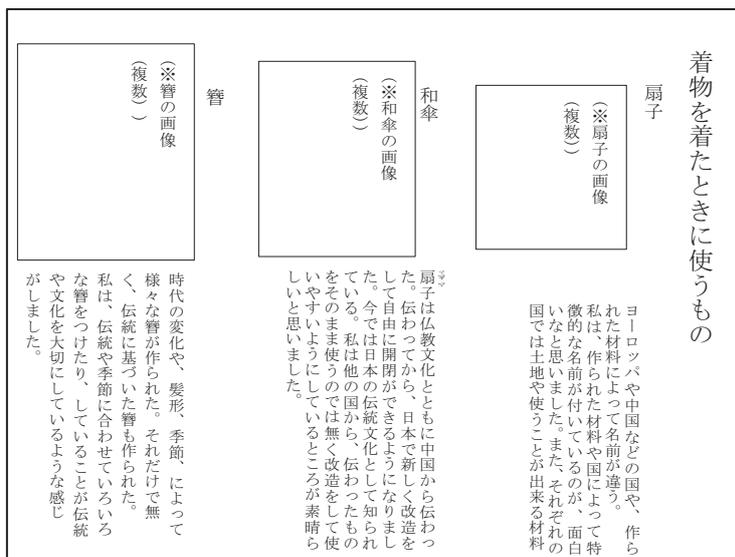
図1 クラゲチャート



Bは題材として「着物」を選択し、「着物を着たときに身に付けるもの」という観点から和傘、扇子、簪を小見出しとして立てている。授業では、閲覧したサイトの情報を「事実」とし、それに対する学習者の考え（「考え・評価語」）に分けて記入することとした。Bはインターネットでの調査を通して初めて知った情報を中心にして「事実」の欄に記入しているおり、そこでは伝来や使われ方、材料に着目して整理をしており、テーマに関して道具・飾りを通して日本に持ち込まれてからの具体的な変化のされ方を中心に説明をしている。また、それぞれについて「考え・評価語」には日本に伝わってからの変化を中心に考察や感想が記入されている。

このクラゲチャートに基づいてBはウェブサイト上の写真を選択し、pagesの枠づけ機能を用いて次のようなパンフレットの下書きを作成している。

図2 パンフレット（下書き）

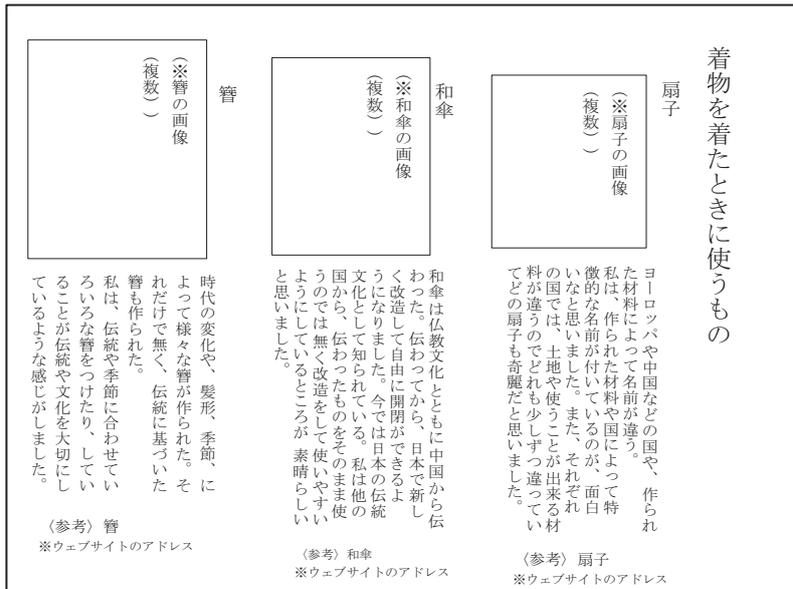


見出しには「着物を着たときに使うもの」という観点をを用いて、「扇子」「和傘」「簪」についての写真と

説明を行っている。図2では、割り付けのイメージを反映させて、写真の大きさと配置、ならびに説明の文章の枠づけと文章の改訂の位置を図式的に示している。写真は、扇子では20枚以上の扇子が開いた状態の画像、和傘では10本近くのやはり開いた状態の和傘を上方から撮影したもの、簪では30本程度の簪が立体的に飾られたものを用いており、それぞれについて材料や伝来、使われ方について説明を書いている。説明の文章はいずれも日本に伝わってからの変化を内容としており、写真では日本に伝わって変化した道具を俯瞰できるような画像を選択している。写真と説明にそれぞれの機能を持たせ、相互に補完しながらパンフレットの紙面が構成されている。

9時間目でこの下書きを振り返ることを通して、10時間目には次のようなパンフレットを完成させている。

図3 パンフレット (清書)



見出し、小見出し、画像については下書きと同様である。説明の文章については、「扇子」の説明を書き加えと「和傘」の語句の修正を行っているが、その他については下書きと同じである。説明の文章の位置については、下書きでは横の並びにずれがあったものの、清書ではその並びが揃えられている。また、〈参考〉として作成にあたって参照したウェブサイトのアドレスが説明の下に加えられている。ここでは、パンフレットという表現媒体の特徴に沿った割り付けと構成が認められる。

5. まとめと課題

読むことや情報との関連から構成された書くことの教科書教材を用いて、ICTの活用によるパンフレットの作成という書くことの授業と学習の実際を検討した。情報の扱いについては「三つのデザイン概念」に依拠し、読むことから書くことを通して画像と文字テキストによる意味構築を軸とする単元を構成した。また、ICTの活用については、学習の過程を授業者と学習者、学習者相互で共有しながら、自身の学習の振り返りにつながるような交流活動を取り入れた。

画像と文字テキストによる意味構築の学習過程の構成については、写真のイメージと言語的説明との相互関係を相互に補完するようなかたちでパンフレットの作成が行われていた。また、iPadのkeynoteとpagesを用いて枠づけをしたりパンフレットを作成したりすることは、3時間ほどの授業時間で学習者は抵抗なく比較的容易に行うことができている。ロイロノートに提出しながら自身の作品を説明し、交流する活動も比較的スムーズに行うことができた。

一方、課題となるのは画像と文字テキストによる意味構築の過程をどのように保証するか、またその学習過程をどのように把握するかである。タブレット端末を用いること、ロイロノートを用いることによりパンフレット作成と教室での学習状況の把握をしながら交流活動を行うことは可能となったものの、説明の文章

を書く際には紙面の枠に調べた情報を要約しながら書くことに作業が偏りがちとなり、また写真の選択においては非常に多くの写真を見ながら紙面に当てはめることに作業が集中しがちとなる。よって、当初、意図していたような「語り手」としての書き手の育成については困難が認められた。写真、説明という異なった性質を持つ構成要素について具体的にどのように批判的に検討しながら全体としての意味構築にとりくめるようにするかが問われる。これは、教科書教材を用いた単元構成をどのように行うかという課題に直結するものであるが、ICTの活用により単元の出口に向けた作業や操作自体が円滑に行える一方、こうした単元構成の流れを学習者の意識に沿ってとらえ構成することが重要になる。2.で取り上げた先行する授業実践で論じられていたように、題材や素材の選択、選択した素材に関する画像や文字テキストといった資料の情報についての検討がより必要になるものと考えられる。こうした点については、本稿では学習の実際として十分な考察ができなかったが、資料の情報の批判的な検討過程と表現による意味構築の関連について分析と考察を行うことが今後の課題である。

引用・参考文献

- 遠藤仁・渡邊恭介（2020）「小学校説明文教材の構造と表現に関する基礎的研究（6）」『宮城教育大学紀要』55,pp.1-12.
- 奥泉香（2018）『国語教育に求められるヴィジュアル・リテラシーの探求』ひつじ書房
- 粟飯原美咲（2020）「図表やグラフを用いた「書くこと」のデザインの改善」『国語科学学習デザイン』第3巻第2号,pp.64-74.
- 小原俊（2012）「グラフや図表を活用した学習について」『月刊国語教育研究』No.485,pp.36-37.
- 小林一貴・多和田仁（2017）「言語的テキストと図表との相互関係に基づく書くことの学習の展開」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』第19巻,pp.11-19.
- 後藤昌幸（2016）「情報を選択活用する力を育てるための一視点―「すがたをかえる大豆」を含む単元の実践をもとに―」『月刊国語教育研究』No.530,pp.10-15.
- 高井太郎（2018）「ICTを活用した作文ワークショップの実践―1人1台のChromebookが使用可能な中学1年生を対象として―」『国語科教育』第84集,pp.49-57.
- 中橋雄・中川一史・佐藤幸江・青山由紀（2016）「国語科学習者用デジタル教科書のマーカー機能と授業支援システムの画像転送機能を活用して言葉を検討させる授業における指導方略」『日本教育工学会論文誌』40,pp.105-108.

2022年1月4日受理

